

三十稻場遺跡調査略報告書

長岡市教育委員会

中村孝三郎著

三十稻場遺跡調査略報告書

長岡市教育委員会

発刊にあたつて

ハイウエー時代を迎えて、遺跡や埋蔵文化財を保護し、伝承することは、我々の責務であることは申すまでもありません。

ご承知のとおり、関原丘陵は新潟県下で最も著名な馬高・三十稻場遺跡を有する考古学の宝庫であります。四道八号線の関原バイパスの計画が決定し、しかも関原丘陵を通過する公算が大であるという昭和四二年の秋に、この問題について県教育委員会に協議いたしましたところ、あけて昭和四三年一月、県の意向として関原丘陵の一部を試掘調査し、今後予想される都市開発に対処してはどうか、発掘調査費については国及び県費補助を考慮することになりました。

発掘調査の意義を考えた場合、幸いに関原バイパスが遺跡を通過しなかつたとしても学術的な意義からして十分価値あるものと判断し、三十稻場遺跡の発掘調査にふみきつた次第であります。

昭和四三年八月一七日から六日間、長岡科学博物館考古研究室・中村孝三郎氏を中心に、越後古代研究会員一五名の調査員のかたがたおよび、地元関原町あげての協力と中学校、高等学校の研究クラブ班等三一五名、延べ一九五名の参加を得て、一、七七一平方メートルにおよぶ発掘調査を実施しましたが、幸い天候にも恵まれ大成果をおさめ、八月二二日無事発掘調査を終了いたしました。

本調査は、県下における最大規模のものであり、予期以上の厖大な出土品の整理には、なお相当の日数を要するので、今回はとりあえず略報告書として発刊することといたしました。

最後に、この発掘調査を指揮されたとともに、この報告書をまとめられた中村孝三郎氏はもちろんのこと、この調査にご協力くださいました新潟県教育委員会および調査員のかたがたをはじめ、中高校生、地元関原町あげての献身的のご協力に対しましてあつくお礼申しあげます。

昭和四五年三月

長岡市教育委員会 教育長 中川信

三十稻場遺跡調査略報告書

遺跡の所在 新潟県長岡市関原町一丁目（下除）小字浪蘇沢、櫛山

○沿革

三十稻場遺跡は、国道第八号線に臨む長岡市関原町の南側に位置し、八石山系の末端をなす櫛山のすそにひろがる広大な扇状性台地上に残された縄文後期の遺跡である。このあたりの往古の姿は、松・雜木の繁茂する平地林であったことが推定されるのであるが、現在も櫛山のすそにそい、東西に向け遺跡地帯を貫いて、幅約四〇ほどの農道が残されている。この道路は、日本海の古くからの漁港出雲崎から遠山山脈の剣が峰越を越え、鳥越と突出、あるいは石地から裏箱崎をこえて岩野から西田に入り、黒川を渡り、白鳥部落の蛇山で再び谷川を渡り、三十稻場の櫛山腰をぬけ、高寺部落を通り、さらに深沢の大沢の谷に沿うて利沢に通し、浪蘇川渡船場を経て、朝日部落の南背にある新坂を登って、百塚原を通り、片貝から山谷・小栗田原を抜けて小千谷に達する古い時代の魚沼街道で、通称「浜道」と呼ばれ、日本海岸と魚沼山地の三郡を結ぶ交易の主線本道をなすものであった。この道路は徳川末期から明治にかけて、現在の国道八号線道路の開設整備されるまで、はるかな往古から平安・鎌倉・室町・徳川期の長い年代にわたって、主道として人馬の往来が激しかったことが伝承されてきた。

三十稻場周辺は、小字の土地台帳正名を「一蓋」と呼ばれて現在に至っているが、戦国の将「浅倉一族」の末流と伝えられる長岡市福田町藤橋の旧家封家「遠藤氏」の祖が、現在の地に開拓居住する以前、元龜年間浅倉家の滅ぼ後、越後に落流し入り、はじめにこの地三十稻場に居をかまえ、開拓土着したところと伝えられて、その名を地名として残すという。そのためか遺跡附近には時にふれ、須恵器の残片がいまも採集されることは、口伝えを裏づけているのであろう。

また根深く今日までこの地方に伝説化されてきている「関原好空（がんどう）」の由来は、天和元年（一六七四年）高田城主松平光長が、蕃政びん乱の責で四国に流人後、四散した高田藩浪人の一人、徳左衛門（姓不詳）を主領とする十数人の野党が、当時高田・長岡の藩境をなす高寺山附近を根据地とし、群をなしては四辺の村落を襲い廻っていたという。その観本を記した「長岡藩士武勇逸聞」という古文書の序しが下除の清水家に残さ

れている。原文は長岡藩三代目の領主牧野忠良の御用人、山口舍人の手記と伝えられている。この文書によれば、当時の高田藩領の駒野町茶屋から、小頭、足軽、白鳥の庄屋等によって編成された「がんどう」討伐隊が、白鳥の庄屋三左衛門宅に集合し、それよりかれらの本拠高寺方面に向う途中、その中間地点の

「三条（三十）稻場茶屋ニテ小休シ。」

隊勢をととのえ、野獣狩取りに出かけ、やがて召取部隊は徳左衛門勢を次第に長岡領内の下除原に追いつめていった。村々では急をつげる鐘の音や、「急船状」の伝達によって鎌・木刀・くわ・竹やり等をもった百姓村人たちが「下除へ、下除へ」と集ったという。時は、ちょうど秋の収穫前のこととて、当口領内税見で下除村に川張していた又開番の勘定奉行鈴木茂衛門・郡奉行谷川權太夫・代官長島金右衛門・九里金三郎等の諸藩士も現地にかけつけ、代官長島は歟主領徳左衛門と林中で出会い、數十合切りむすんだが、徳左衛門は高田浪士であるだけに、なかなかの剣の使い手で、わずかの手傷を負うただけで逃走した。しかし、最後に初秋の風渡る下除の東原で、新手の下除の庄屋清水丑之助おとび長岡藩士・倉林五衛門によつて、すすき原を血に染めてついに切り殺された。

それは、延宝二年九月九日の午後三時頃のできごとであつたことが記されている。この文中に「三条稻場茶屋」という十語にみたないことが登場してくるのであるが、この茶屋の所在した地点は、余田の池や、錦田山を迤々とくる旧農道が、さきに記した三十稻場を東へ西にぬける浜街道に合流するあたりか、さらに東側の小さな谷となつていていたことが、強く推定されるのである。また「三条」は、「三十」に通ずる語呂を含み、聞き書きの誤文とみられ、さらに前後のできごとを地理的にみても、現在の三十稻場もこの事件の小舞台となつていてことは、否定できないものであろう。そして、この三十稻場という地名が、妙なめぐり合わせで三百年前の古文書に残された最古の記録と推考されるのであって、今はこのあたりに人家もみられず、ひとり篠山の松林がわたる道跡附近も、かつては茶店すら営まれていた主要往還道路を通じていた當時の姿がしのばれるのである。

宝曆六年（一七五六年）、寺泊の医師丸山元純の「越後名寄」巻七、○原の項には

閑原 三馬郡

長岡ヨリ柏崎へ行中間ニ在。法サ一里余有、五段田村ノ上ナ爾岡也。即閑原トガスル村有、近世過半焼ト成、四方ノ見渡シ氣色有。

とあるが、宝曆年間にすでに閑原丘陵台地の開拓が、かなりの面積にわたってすめられていたことが考えられる。また明治十一年、明治天皇の北陸巡幸に際し、沿道町村長が當時新潟県庁に提出した閑原関係の「閑原新田地誌」には、柏崎桃杞鳥の人、閑矢清左衛門が慶長年間、一説には寛

文年間、現在の閑原郵便局附近の十字路辺に土著して、次第に閑原台地の南側地點を開墾したことが記されている。しかし、中原とは小谷をへだてた三十稻場附近の開拓は、より若干の近世にすすめられたようみられるが、詳細は明らかではない。

明治十九年九月、アメリカの生物学者エドワード・シルベスター・モース氏によって発掘された東京大森貝塚の調査は、わが国における科学性分析を基礎とした最初の考古学調査であった。そして、その所論とする「土と石器の分類」「食人説」「フレ日本人説」等は、影響するところをわめて深く、また広範に及んだことが推考されるのであって、三十稻場遺跡もそれら研究の波及による明治二〇～三十年ころから、地元閑原町の石器愛好者によつて、縄文後期の發達した石器工業から作出された繊細優雅な、袖珍的な玉類・石鏡、あるいは小形碧玉石斧等の採集がなされてきて、その量はおびただしいものがあり、三十稻場遺跡の越後の考古学史上にしめる資料位質はきわめて高いものがあった。しかし、この遺跡が日本の考古学線上に浮かび上るのは、「火焔土器の發掘者」である地元の故人近藤萬三郎氏の昭和九年頃からの発掘調査がすすめられてからで、その出土物が、東京大学理学部人類学教室の八幡一郎氏によって、中華日本の「縄文後期三十稻場式土器」として、北陸を代表する標準模様が設定されたことによって飛躍し、さらに斎藤秀平氏により「新潟県史跡名勝天然記念物調査報告書」第七集に三十稻場土器に施された別突文模様を中核とした編年規格化がなされたのであった。

また昭和十年から以後十年間にわたる近藤勘治郎氏の「石器時代遺跡探訪日誌」には、數十回にわたる三十稻場の表面採集の土器拓本や、石器図等が残されていて、越後上り編年初期の苦心が紙背にじみ出ている。さらに、昭和十五年五月にはオランダの若き考古学者ジュラード・グロート氏の三日間の発掘調査が行なわれ、近藤萬三郎と筆者が協力した。戦後となつては、昭和二十三年に筆者および柏崎市三井田忠氏（日本人類学会員）による小発掘調査がなされた。続く昭和二十五年七月には早稲田大学文学部教授滝口広・同助教授西村正衛・同講師土口時雄氏（同学生二十名）等の発掘調査がなされた。この発掘は「滝口広・西村正衛（越後閑原縄文遺跡）早稲田大学教育会研究叢書 第三冊」として記録が出版された。また昭和四十二年に出版された拙稿「先史時代と長岡の遺跡」には、過去のおびただしい地元採集遺物を中心とした一文が記載されている。

三十稻場遺跡は、南北二五〇m、東西一五〇mに及ぶ越後A級中屈指の大集落址で、その全面積にわたって遺物の散布がみられるが、その遺物包含層は、約二〇～四〇cmの浅層にあって、今日までの水年にわたる農耕による破壊が強く、ことに近年は煙草栽培による耕耘機の深耕性から遺構・遺物の崩壊が目立ってきた。

越後の鶴石川と渋海川にはさまれた刈羽郡鶴石郷と小国郷にまたがる背面山脈には、八石山（五一四m）を主軸とする多くの起伏や、低い連峰をなして北向にひろがる八石地盤の形成が立地されている。この八石山系はさらに高度を下げながら北東に張り出し、東方に延びた分派の先端は高度一〇〇m前後の岡阜連峰丘陵をなし、信濃川の造成した沖積地、越後平野の縁辺に迫って終り、またその西方の一支派は桜形山（二九九m）を主点に大秋・宮本部落の背後に延び、さらに黒川に沿って東へ北向し、関原丘陵となり、片刈城址等の峰々を連ねて牛ヶ首山腹を形成し、その突出先端は標高一〇四mの櫻山の松林となっている。またこの櫻山を起点としたその北方前面は、沖積平野にゆるく半島状にはり出した頭状性の関原台地となり、信濃川沖積平野と、刈羽郡の東側山地から流れ出る黒川の沖積地の接合点の五反田沖でこの台地は沈没している。関原台地は東へ一六〇〇m、南へ北へ五〇〇mの舌状を呈し、頂高部で標高七〇mを示し、信濃川水面との比高は四〇mである。この丘陵台地の中央部を東へ西に貫いて国道八号線が通り、人口六〇〇〇の関原の市街が展開している。

遺跡は、関原市街と櫻山の間を西へ南に走る牛ヶ首街道の南側、櫻山のすそ遠藤沢一帯に所在し、現地は東・北・西の前面が大きくなり、黒川沖積地をへだてた西と北方は、戦国上杉廟の山城であつた三島谷城址や、小木の城址をつらねる道山山脈の北走がみえ、はるかな跡跡の秀峰につらなりを示している。北には越後平野がひろがり、さらに東方は信濃川をへだてて裏が岳・守門岳等の高峰がはるかにかすむその前面を飾って、森立崎・鋸山・金倉山等の越後東山山脈の低山嶺が望見される。

三十稻場台地はそのほとんどが畑作地で、ゆるく平坦性の傾斜を示しながら、北方の原新田へと接続、谷川のつくった沖積水田地帯に達して終るが、その西端の崖上には舞山の「原」の小遺跡があり、縄文後期の上器を出す。また西南方にある「城扣」の松林台地には、昭和十九年の大水害による崖崩れで発見された縄文中期の遺跡がある。

また三十稻場台地の東側には、細い帯状の幅三〇~五〇mの小谷となり、水田が営まれているが、その東対岸には縄文中期の「火焰土器」を出土した知名の馬高の大形遺跡が相対し、さらに五〇〇m東北にした「上の沢」の畠地からは縄文草創期初頭の小窓が汎式の錐状尖頭器が採集される。上の沢から六〇〇mへだてた上除八幡神社裏には、池に臨む「轟堂」の縄文中期の遺跡があり、また関原市街をこえた北方の五反田部落との間ににある三輪荷荷社の周辺には、「六右衛門清水」「三輪」「瓜割」等の縄文後期の小遺跡が点々と所在している。さらに、標高二九mを示す関原台地の最北端の低地には、長岡電鉄の関原駅を中心に、下除の「下屋敷遺跡」がある。奈良時代から平安朝にわたる直徑三五〇mの大形集落址が、昭和二十七年初冬の土地改良工事によって発見され、数十の堅穴状の住居址と、多くの土師器・須恵器と内面黒塗状のわんや墨書き土器、木片や生活残片を示すモモ・クルミ・ウリ等の種子が検出され、「下屋敷式生活期」の標準模式とされている。

調査

期日 昭和四十三年八月十七日～二十一日（六日間）

主催 長岡市教育委員会

調査担当者 長岡科学博物館考古研究室（日本考古学協会員）中村幸三郎

調査員（越後古代研究会員十五名）

大手高校教諭若松茂、岡南中学校教諭多野静治、十日町高校教諭植田義彰、長岡市教育委員会指導主事丸山松夫、東北電力長岡営業所竹田祐司、

津上長岡工場神林昭一、三条市松井寛、大手高校教諭金子拓哉、三条商業高校教諭中島栄一、六日町高校教諭佐藤和彦、立正大学生鈴木敏朗、燕市

山後敏行、南浦下田村石月俊朗、堀之内中学校教諭星野芳郎、小出町原喜久男

参加者（地元）長岡高校定期制開原分校教諭および生徒、開原中学校校長八田明比古および教諭・生徒

三条商業高校考古学研究班生徒、十日町高校地質研究クラブ班生徒、岡南中学校歴史クラブ生徒

長岡市教育委員会社会教育課 内藤忠一課長他全職員・中央公民館全職員

長岡科学博物館小柴阿榮・外山武・小林敦司

（以上三十五名）

三十稻場遺跡は、さきにも記した如く、その集落の包含面積は広く、南北に二五〇m、東西が一五〇mに達する越後屈指の大形遺跡であるが、その包含層が浅いため、その余地にわたって春秋の耕作で遺物の浮上散布がみられる。しかし、そのうちでも漢厚遺物のみられる中心部をなすものには、五地点が載えられ、さらに大別すれば、「本三十稻場」と「南三十稻場」の二地点に集約されるのである。

東側の水田に隣接する「遠藤一五一三～一五一四番地」から、農道を隔てた「一四九六～一四九七～一四九八～一五〇〇番地」にわたる約六アールの地域が、本三十稻場の中心区域をなし、この中でも水田に接する「一五一四番地」は、昭和十五年のオランダの考古学者ジエラード・グロート氏の発掘地点である、「一五一三番地」は、昭和二十五年早稲田大学の瀧口教授の発掘トレンチが設定された場所である。また、「一四九七番地」は、昭和九年来の近藤篤三郎氏の小発掘が続けられた地点であるが、戦後の昭和二十三年に、筆者および三井田忠民の小発掘が行なわれた地点でもあった。また山ろくの「深道」をはさんだ地帶は、「南三十稻場遺跡」とよばれているが、農道から南の山ろく傾斜地は、古くから松

林となつていて、戦後の「未整地開拓」により、新らしく筆者によつて発見された遺跡地域である。浜道の南側に位置する小字「糠山二八〇〇～一四一番地」から「二八〇〇～一五〇番地」に西に及ぶ地点および浜道の北側の「遠藤一五〇六～一五〇七～一五〇八～一五〇九番地」を括り、約八アールに及ぶ地域が濃厚な集落性の遺物包含が推定された。

近年に至つて、関原市街の交通車輛の急激な増加とともに、國道八号道路の狹小から、バイパス路線の建設が北陸地方建設事務所によって計画され、その計画一線が、門原の南側の三十畳場遺跡の浜道街道附近を、東～西に走る測量点の打杭等がみられることから、國土開発にもとづく土木工事の破壊性を考慮し、事前に遺構および遺物の収納保管等のためと併せて越後の先史研究が、土器編年の中から個々の住居形体の確認、さらに大きく集落そのものの全形把握へと研究がすすめられてきた諸觀点もあり、今次三十畳場の発掘は緊急に計画されたものであったが、はじめから遠跡にかかる道路床の計画線全面にわたる大規模な露景検出によつて、その遺物の収納が目的とされるものであった。

◎発掘 摘

○発掘トレンチの設定（附図二～三参照）

◇第一 T

第一トレンチ（以後本文ではトレンチを「T」の略号を使用する）は、旧浜道に接する糠山二八〇〇～一四〇と一四一番地の煙草畠の北端に東西方向して、ABCの密着した四本のトレンチを設定。各溝はその幅四mとし、長さは各三六m。これを四m×四mに区画して、東側から各1～9の小区を設けた。四m方形の発掘区画は、現在沿例とされる二m単位の区画に対し四倍の内容積をもつもので、発掘土の搬出や、記録等に困難がたえずともなるものであるが、調査員の長い間の経験をえた熟練度と、「広大面積の発掘」という目的規模に準じてあえて以下の各Tにおいてもこれを実施した。なお、このあたりは第一Tのさらに南側に接続してかなりの遺物包含面積が推定されるのであるが、今次は要急地点を中心として、それらは二次性の処理方法を考えることにした。第一Tの発掘実面積三八〇m²（担当一若松・多多・稻岡・桐形）

◇第二 T

第二Tは、浜道に沿う糠山二八〇〇～一四一番地の北端に耕作道路間を区画し、またこの附近の遺物包含の南限性をもとめ、幅一〇m、長さ八mのABCの三本の狭い発掘溝を密接させ、東と西方向に設置した第二Tの実面積一八〇m²（担当二竹田・丸山）

◇第三 T

第三Tは、さらに浜道に西統した糠山二八〇〇～一四七から同一四九番地に至る煙草畠に東～西して、幅一〇m、長さ一八mのABCの三本の細

い発掘溝を設けた。第三Tの発掘実面積二八〇m²（担当＝山後・石月）

◇第四T

第四Tは、本三十稻場遺跡から、南方の南三十稻場へと、長く延びてきた弓の字状の集落形成が東と西方向に大きくカーブを描く要點に当り、注目される地点であった。そのため浜道の北側、遠藤一五〇五～一五〇六～一五〇七番にひろがる地点に、第三Tと向かい合わせ、その連続地点として、やや方形状に「五区西」、ABCDEFの六本の発掘溝を密接設置した。しかし、そのうちの短溝下Tは、ETから二m東側に離れてこれを設けたが、これは全般の作業進行に応じて順次拡大し、第六Tとして、やがて第五Tと並行させ、このあたりに幅広い接続Tを計る考え方で設置したものであったが、時間切れのため発展せずに終ったTであった。第四Tの発掘実面積四〇六m²（担当＝松井・星野・大橋）

◇第五T

第五Tは、浜道に北接する松、柳木等の茂る三角形をなす平林地北側の煙草・大豆等の栽培された遠藤一五〇八～一五〇九番地の畑地が、第二Tおよび第三Tとの一連の連続包含地帯にあるものと推定し、正東～西に長く、西側は道路による若干の変形を示したが、幅一六m、長さ四八mのABCDEFの四本の接着した大形発掘溝を切つて、これを四〇区画した。第五Tの発掘実面積四四五m²（担当＝金子・中島・駒形・原）以上五地点の露呈計画面積は二二〇七m²であったが、六日間の発掘実面積はその八四%の一七七一m²で終った。

○地層序と包含遺物 (附図4～4a参照)

◇第一T

第一Tの地層堆積は附図4-1の断面実測図に示す如く、ABCの各溝ともきわめて平坦な堆積をなし、また自然礫石の含有はきわめてまれであった。第一層は一五と三五cmの黒味がかった上表耕土によつて覆われ、その下の第二層は約四〇cm前後の真黒色を呈する有機物腐殖性の平面状の層によって構成されていたが、東側のBTと1・2区を中心と厚さ一〇cmほどのうすい黒褐色上層が円形をなし、またその断面がレンズ状を呈して第一層と第二層間に挟んでいた。最下層をなす第三層は、黄褐色の平坦性地山ローム層土であり、この地層は三十稻場台地の基盤をなすもので、第四紀洪積世・矢代層に所属するものであった。また遺物および遺構は、第一層下部から第二層にわたって、かなり濃厚な包含が示されていたが、その中心は第二層上面が当時の生活地表を構成するものと推定されるのであった。この附近は西と北へ若干の傾斜性がみられ、その流土性から包含層は浅く、耕作による遺物の破壊性から、浮上りやかく乱が強くみられるのであった。次に主なる出土遺物とその深度(cm)を示す(トレンチ内遺物出土位置圖表は省略)

△A
T

- 1 区 中央から石鐵（一25）他土器片多數出土
 2 区 土器片が三地点に密集出土（一27）
 3 区 土器片および黒耀石剝片散乱

- 4 区 中央から石おもり（一16）土器片少量
 5 区 中央、板状石器（一36）土器若干出土
 6 区 南三十鋪場式土器片多量に検出さる。
 7 区 北側、石鐵（一22）土器片小量
 8 区 土器片多量出土

- 9 区 土器片少量
 10 区 土器片多量出土

A Tは、住居等の密集遺物包含地點の外周部に當るため、遺物は散在し、石器類は稀少であった。土器は縄文後期の南三十鋪場式および三仏生式、塔が峰式のものが主格をなしていた。

△B
T

1~2区 第1区および第2区の境界線附近を中心にして、深さ三〇~四二cmの地點に人頭大の礫石十二個をもつて石組された、第一炉址（附圖三一、A T）が検出されたが、その東側の一部炉石は崩れをみせて散在していた。この附近は直径三mにわたって木炭粒・灰・燒土の混合がみられ、その中に完形の小形つばおよび注口土器が四点をはじめ、石鐵・磨製石斧・粘板岩の石核・ニンドスクレーバーや、多量の縄文後期の三仏生・塔が峰式の土器片が出上した。しかし、この附近には床面や柱穴性のピット等は発見されなかつた。

- 3 区 中央部 石鐵二点・磨製石斧・石核（一23）と若干の土器片が出土
 4 区 北側 注口土器（一36）・磨製石斧二点（一20）（一35）・石おもり（一36）土器少量
 5 区 東側 石鐵（一33）・西側石鐵（一22）土器若干量検出
 6 区 北側の A Tに接して、深さ二〇cmの浅い地點から図版四二上の如き直徑五〇cm。焼けた石鐵で円形に配石された小形の第一号炉址が発見され、附近には若干の燒土および灰等がみられた。この小形円形炉を中心にして小形の完形つば（一23）、額面性の凸起把手（一30）三点の石鐵（一25

(30)・(石おもり(一28)・磨石(一30)・凹石(一25)等と南三十稻場式の土器片が多量伴出された。しかし、住居の床面は把握できなかった。

7 区 南三十稻場式土器片少量

8 区 中央から西側にかけて、深さ一20cmの地点から、南三十稻場式の土器片が多量に散在出土

9 区 北側から石鐵(一18)、東側の8区に接する地点から土器片が若干量検出をみた。

△C T

CTは、北接するBTの土器包含の流れの推考から、附近に炉址の存在が推定されたために、BTに南接して5・6・7・8の4区を増設追掘を行ない、9区において炉址の発見をみたために、さらに炉を中心とした西側に二m×六mの変形トレンチを追加増設した。CTにおける主たる遺構および遺物は次の如し。

5 区 時間切れのため半掘で終る。

6 区 東側 石鐵(一27) 土器片少量

7 区 中央部 有脚石皿(一41)・凹石二点(一20) (一35)等が検出された。

8 区 南側 復元可能の深鉢(一40)・北側から南三十稻場式大形深鉢の把手(一25)他土器片多量出土

9 区 東と南隅から磨製石斧二点(一40)・石おもり(一40)・微量の土器片を検出

追求していた炉址が、西側に接して発見され、南三十稻場第三号炉址と命名されたが、深さ40cm。耕作や雨水積水のためか、周辺の土じょうがやわらかく、床面および柱孔等は不明であった。第三号炉には、長径九〇cm・短軸五〇cm・中央に直徑三一cm・幅一七cmの円筒性のA炉が縦文、B炉がより糸文を施した大形深鉢の上部を削ぎ切りにした土器をすえ、そのめぐりを、長さ一〇~二〇cmの八箇の自然石で開い、円形炉を作出し、さらに西と北側に同一工法の炉を附着した二重構造のダルマ形をなす石田炉で、また底部も土器破片をもって平らに敷きつめられていたが、外第炉の石組みの東側の一部はすでに移動消失させていた。

なお、第一TのD溝は、時間切れのための未掘となつた。

◇ 第二T

第二Tの地層序は、附図四・5・6の如く中心部においては、第一層は厚さ一五cmの耕土、第二層は厚さ一〇cmの黒褐色を呈する土層で、第三層も約一〇cm前後の黒色層土、第四層は基盤ロームで平面堆積を示していたが、5の東側断面図にみられるように南側は浅く、北側の浜街道に接する

にしたがって深くなっていた。また遺物の包含は、第二層から第三層にわたっていたが、中心をなすものは第三層の黒色土層の上面を主格としていた。主たる出土物は、

△A T

1 区 東～北隅の方一帯にわたり、自然石一二箇から成立する第四号炉址が発見された。深さ三五cm、しかしその配はすでに崩れをみせていたが、周辺にかけて灰・焼土の混在が示されていた。この四号炉を中心に、石鐵（一31）や、多くの南三十畳場式および若干の三十畳場式土器片が検出された。

2 区 南壁近くから右腰の小形石皿（一24）、中央部から石鐵（一31）・石おもり（一21）と、かなりの三十畳場系の土器が出士

3 区 中央部 石おもり（一25）、北壁附近から土偶の脚部（一32）・石鐵（一34）（一34）・石おもり（一20）および多量の南三十畳場式土器片が出士

4 区 南側 石おもり（一25）、北壁、土偶破片（一30）他土器片多し。また北壁に直徑一、五m、深さ一七cmのピットおよび直徑〇、八mの浅いピットが検出され、土器少量出土

5 区 土器片散乱稀薄

△B T

1 区 北側 石おもり（一35）、南二十畳場式土器片若干量出土

2 区 南側 磨石二点、北側、注口（一5）、磨製石斧（一35）、土器片少量

3 区 東～北隅地点に、大形土器片および自然礫の配置された半残遺構の第五号炉址が出現し、附近に灰、燒土若干、また炉に接続して深さ三八cmの小ピット検出、西側、石おもり二点（一28）（一35）、磨石（一23）、他に土器やや多量検出

4 区 中央 石おもり（一20）、土器片微量

5 区 遺物稀薄

△C T

1 区 東壁、石棒頭部一点（一41）、東～北隅にて、孔内に土器を含む直徑一五cm、深さ一七～三一cmのピット三箇検出、注口土器はじめ南三

十種式土器片多量出土

- 2 区 北壁附近に小ビット二箇検出、内部に土器が潜在す、その他復元可能な深鉢を含む多量の南三十種式と三十種式土器出土
3 区 東側 石おもり（一29）、土器若干量
4 区 北と西部に五箇の小ビットあり、三十種式と南三十種式土器が多量に出土
5 区 区内に点々と、円形あるいは橢円形の大小、一一箇のビットがあり、深度一〜二七cm。いずれも孔内に土器を含む。そのうち北と西隅のビットは最大形で、直径八〇cm、深さ七cmあり、孔内に径一〇cmの焼土塊や土器が潜在し、注目された。

◇第三T

三十T附近は西と南にゆるく傾斜し、発掘溝の一〇m離れた南から西側にかけて、幅七〇cmの小さな時間に湧水性の小川がつくられていた。第一層の黒色粘土は、厚さ約一〇cm前後のきわめてうすい層をなし、また、第二層は黒褐色を呈し、東側は一〇cmの薄層をなしていたが、西行するにしたがって次第に厚さを増し、二〇cm前後の堆積を示していた。さらに、第三層は黒色の有機物を含む軟層土で、この層は第二層と反比例して、東側は二五cmの厚層をなし、西にゆくにしたがって一五cmのうすい層となり、当時の植物繁茂とその堆土關係が示されるものの如くみられ、また、その下層は西傾したローム層土が基底をなし、遺物は主として第二層下底から第三層に達及していた。

△A T

1 区 東壁ちかくから、局部性のものであるが、かたくふみかためられた床面に、直径約三mの円形状の焼土、灰等の厚層が出現し、第六号平炉址と確認された。その灰・焼土の混合土はさらに北壁にそって西側に延び、柱口、石棒（一30）、すり石（一32）、凹石（一15）、蓋、復元可能な一括土器群（深鉢）はじめ三十種場と南三十種場と三仏生式の多量の土器片が出土。また、二〜三の柱孔とみられるビットも出現したが、東側は農道のため発掘を中止した。

- 2 区 北側半部にみられた若干灰等を含んだ濃黒色土中および南隅附近から多くの土器片が出土
3 区 北側 土器片少量
4 区 中央部に小ビット二箇あり。ビットを中心にして石鐵・凹石・石おもりをはじめ、三十種式等の土器片がかなり出土
5 区 小形土器片が散乱
6 区 土器片少量

7 区 土器片は微少の出土で、遺物包含の西ノ限界を示していた。

△B T

- 1 区 東北隅に深さ二五cmと四〇cmに達する厚い遺物の密集地点が露呈し、多くの南三十種場系土器片が収納されたが、その中には注口土器、四石類が含まれていた。
- 2 区 北と西隅から一括した土器群、凹石（一40）等が出土。また南側から石錐一点（一15）（一30）凹石等が出現した。
- 3 区 北側半部には、若干量の土器包含をみたが、南半は遺物が稀薄。
- 4 区 区内全面に遺物がみられたが、散乱稀薄を示し、東と北隅にて石おもりが出土（一27）。
- 5 区 中央部 青緑色蛇紋岩製の小形磨製石斧（一28）、石おもり（一37）が検出されたが、土器片は少量であった。
- 6 区 土器片が散乱少量。
- 7 区 土器片微量。

△C T

- 1 区 三十種場式と南三十種場式と三仏生式に及ぶ土器片が多量出土。
- 2 区 北壁附近から木炭細粒、灰、焼土等が露出され、混土中から石おもり・凹石および土器片が多量に検出された。
- 3 区 北壁部分から灰、灰・焼土等が検出され、北側の浜道の道床中に住居の中心が強く推定された。中央部から石錐・石おもり・凹石類および土器片が多量に収納された。
- 4 区 南側から石錐（一30）と土器片多く出土。
- 5 区 中央部 凹石（一28）、土器片若干。
- 6 区 遺物は稀薄であった。
- 7 区 土器片微量。

◇第四T

第四丁の地層は、南→北には附図4~3にみられる如く、その表土は平坦性を示していたが、東から西方にかけては、同図4~3に示されるようにきわめてゆるく西及傾斜をなしていた。第一耕土層は黒色をおび、10~40cmの厚さを示し、第二層は約30cmの厚みをもつ黒褐色土層で、多くの包含遺物が検出された。また正黒色を呈する第三層は、部分的な断続性を示し、同図4~3の如く点々とその小堆積がみられ、これは第二層中に展開された生活作業や、住居址構築に関するものと推考されるのであった。さらに、その下層は基盤をなすローム層となっていた。

△A T

- 1 区 ATは概して包含層が浅く、1区東壁に接する附近に、三十稻場式土器の密集地点が検出され、多量の土器と、同地点から凹石(12)、石おもり二点(各12)、磨製石斧(120)、抉り込みのある大形抉削器(125)が露在して出土をみた。
2 区 東壁附近 石鐵二点(15)(120)、尖頭器(123)、中央および西側、砾石(120)、磨石(120)、異形土製品(12)、石おもり二点(122)(130)、他に土器破片多量が伴出
3 区 東側から磨製石斧二点(13)(15)、石鐵(15)、土器片少量

△B T

- 1 区 東壁から石おもり(14)、東南隅、石鐵三點(126)(127)(130)、土器片は東南半部に密集して多く出土した。
2 区 散乱土器片多し。
3 区 土器片が稀薄に出土

△C T

- 1 区 三十稻場式土器片若干量
2 区 西側から磨製石斧(15)・石おもり二点(123)(140)と土器片多く出土
3 区 散乱土器片少量
4 区 土器片稀薄に出土

△D
T

- 1 区 土器片が若干量出土
2 区 三十稻場式土器が多量に出土

3 区 やや東側よりの中央部から、長さ一・五cm、幅一・七cmにわたり、木炭細片、灰、燒土の混在地帯が出現し、第九号平炉址と確認された。この炉の周辺混土の中から多量の三十稻場式土器を主格とした、石錐三点（各一・28）、磨石（一・25）と、土製腕輪の小破片が伴出されて注目されるものがあった。また北側から石おもりを検出した。

4 区 土器片が若干量
5 区 土器片少量△E
T

1 区 中央部に径二cm、瘤円状にひらがる灰、焼石、燒土地点が露出され、第七号炉址と確認。同地点から三十稻場式土器の多量密集出土があり、混土層から石錐（一・36）、石おもり（一・29）（一・25）（一・32）と、亀甲形の土鍵（一・23）および注目される完形小形の石棒形土製品（図版一・上）が検出された。また西側の一帯を除いた全区内の第三回黒色土層中に厚さ三・五cmの粒度の細かい赤土を、うすく貼りつめた床面とみられる作成性の層土が露出された。柱孔不詳

2 区 本区においても、中央部から北壁邊にひろく延びた二種強の燒土、焼石、灰等の密集した第八号炉址が出現し、周辺にはおびただしい深鉢・浅鉢・つぼ等の三十稻場式土器破片が累積含まれていた。厚さ三・〇cmに及ぶそれらの混在土層中の、東側から中央部にかけて、三十稻場特有の土器のふた、四点（一・25）（一・25）（一・26）（一・35）（図版一・上）（四九・下）が、上器と石器片中に点在して検出された。また南壁第一区から延びてきた貼床状のうすい赤土の層は、本区中央部にも大きくなりを示し、東と北と西の隣接区の三方向にのびていた。

3 区 この地区も南側から東壁にむけ斜に、おびただしい遺物が累積存在していた。東壁附近から中央にかけて、石錐五点（一・23）（一・29）

（一・3）（一・4）（一・3）、凹石（一・32）、異形石器（一・70）、西側から石おもり（一・28）、北側から粗剝尖頭器（一・49）が検出された。また東壁側中央部に直径一・一cm、深さ四・〇cmの貯藏孔とみられる大形ピットが出現し、底部から石おもり（一・7）、石錐及び若干の土器片が検出された。また南側第二区から延びてきたりすい赤色層の床土は、密集遺物の残流跡方向とひとしく、カーブを描いて東壁方向に斜めに走っていた。

4 区 4区も多量の三十稻場土器が点々と小密集して検出され、その他東北隅からスカラベー（一・45）、中央から南壁にわたって石錐（一・23）、

磨石（一三）、凹石（一五）、打製石斧（一三八）、小形磨石斧の半欠（一四）、小形土偶の手（一三五）等が伴出した。

5 区 西寄りの中央辺から、すでに配石が過去に周辺に散在していた跡、第一〇号が検出され、怪一強のローム上の焼土や、灰、焼石等にまじっていた多量の三十種類土器片を収納、また東壁下から打製石斧（一二）が出土した。

6 区 土器片多し。

△F T

- 1 区 かなり多くの土器片が出土
2 区 土器・石器が散乱稀薄

◇第五T

第五Tの層土累積は、東と西及び南北とともに、附図四～九に示すように、概して單純平面性を呈し、第一層をなす黒色耕土は二〇～三〇cm前後の堆積であったが、BT5～6区の局地点においては深さ四五cmに達する部分もみられた。第二層は厚さ一〇～一二cmの黒褐色土層で、遺物および遺構の包含中心層をなし、その下の第三層は、他Tでみられた黒色層土の堆積はみられず、地山をなすローム層によつて構造されていた。

本発掘Tにおいて、もつとも注目されたことは、広域面積の露呈というその計画条件がもたらした全区域の地山ローム面に、大小浅深のおびただしい孔端（ピット）が、附図五の如く検出されたことであつた。その数はBTで図示した一九〇箇をはじめ、その他図示しない同T2～3区の分、一三箇を加算し、CTでは二〇四箇、DTでは七七箇を数え、合計四七箇に達した。そして、それらのピット構造のほとんどが、垂直性穿孔が主要素を示し、袋状ピットは全く認められなかつた。孔中には大形土器片はじめ、石斧、石おもり、凹石等の石器類を含むものが多く、また孔底に白色の細粒粘土を貼りつめたものもみられた。その大きさも直径一〇cmから一m四〇cmに達し、円形、橢円形等の形体の他、浅く細長い溝孔もあり、底部構造は、孔底が平面をなすものと、放物線的彎曲を描くものがあり、深度も一cmをこすものが確認された。それらのことがらは樹根腐植見解を離く退けるもので、その性格が柱穴、貯藏孔、周溝等の他に、大形残孔に裏面遺構としての考慮もありうるところであろう。また柱穴の残孔の配列に、乱雑不規則さが指摘されることは、住居例のその再建性や、重複増強の行為等が、残孔位置の複雑性をなしていることが推考されるとともに、さらに当時の住居が、上部黒色系土中に築営された場合には、浅い柱根はローム面へ未到達で終り、その痕跡が必然的に上部黒色土中で消滅し去って、下層のローム面が無痕跡となる場合の可能性もあり、住居の床面が、黒色土中でいかに把縫困難であるかということとともに配考

の余地を残すものであった。

次に五T各区検出の主要遺構と遺物を記す。

△A T

A Tは、時間切れのため未発掘で終った。

△B T

2 区 東壁から3区にわたって、近年新運機によつて刷された網状破壊痕跡の第一号焼跡が発見された。流動散在した灰の石砾と、灰・細粒炭・焼土の混合土の中から、石棒破片（一22）、打製石斧（一26）、石おもり（一19）と、南三十種場式土器片が多量に出土、またローム面に小形ビットが四箇検出された。

3 区 散乱土器片多量、中小ビット九箇出土

4 区 深度四五cm前後に遺物の主包含があり、つづみ形土製耳飾はじめ、注口二点、浅鉢破片、凹石（一24）、石おもり（一32）、磨石、石皿破片と、散乱した南三十種場式土器が多量に収納された。この附近には多くの持込み小礫が点在し注目されるものがあり、ローム面に十箇所のビットが発見され、I Pは長径一・四cmの大形、孔中から磨石斧、土器底部等が検出され、深さ四〇cmの3Pの東側から多くの土器片が出土

5 区 南壁近くから、底部を上にして南三十種場式の小形無文わん形土器の完形物が出土したのをはじめ、石鏃（一32）、凹石（一33）等や、多くの土器片が収納された。ビット七箇検出、II Pは深さ三〇cmで、多くの土器片が含まれていた。

6 区 土器片散乱、小形ビット一箇検出

7 区 石鏃（一34）及び土器片若干、ビット一二箇、全面に検出、33P及び、34等は多くの土器片を出した。

8 区 南壁近くに土器片や小礫の密集点があり、同地点から底部を上にして、南三十種場式の小形広口の變形土器が発見され、その他二点の打製石斧（一19）（一31）石おもり（一46）及び土器片多量出土、ビットは二三箇検出、57Pよりドリル及び土器片が出土、また82Pは深さ四三cmで、多くの土器片を出した。

9 区 蛇紋岩製の磨製石斧と、散乱した土器片が検出された。

10 区 土器片は稀薄、石おもり（一30）一点出土、ビット二六箇、105・113・119・121Pは小形であったが、それぞれ土器片を含んでいた。

11 区 全区内に小土器片散見、石おもり（一）一点出土、全面的に四三箇の大・小ビットが散在し、南東壁附近に周溝状の、浅く細長い闊・18・35P等が明らかにされ、12区の11P等と一連をなす周溝生のものと認められたが、その形状は六角をこえる大形の、方形的な一面を保有するものの如くで、特に注目されるものがあった。

12 区 土器片の出土も多かったが、散乱性をなし、石器は一点の石おもり（一）と、中央部の11Pの大形周溝状痕跡の中からつづみ形の土製耳飾り・磨石・石おもり等が検出をみた。大小のビット二箇が露呈

△C T

5 区 土器の浮上りが目立ち、また当時の持込石器がおびただしかった。北側の遺物采集地点から半完形深鉢土器（一）とスクレーベー（一）35）が出土、中央部から石皿（一）35）、石おもり（一）20）、（一）43）二点と多くの土器が収納された。ビット一七箇。

6 区 西と北側の浅い地点から有孔石器（一）、打製石斧（一）20）が発見され、その他三十種類式・三合生式の土器片多量出土、ビット九箇、本区内においても当時の持込石器が多数散見され、また南壁近くの辺々に赤土の薄い貼床とみられるものが検出された。

7 区 南と東隅に直径一〇と一〇cm前後の自然縫九箇と、石皿破片三点で組立構造された直径七〇cm、円形石圓いの第一三号炉址（四版（五）下）が発見された。この炉址の北側及び南と西部の床土上に、幅一m、長さ五mにわたって木炭細粒、灰等の認土質が検出され、多くの南三十種類場三合生式が密集収納をみた。その中には半完形土器や、石おもり等も含まれていた。その他西南隅で注口（一）19）が出土、北側にビット四箇

8 区 土器片が多量・亂雜に散在、ビット一二箇。

9 区 本区も多くの土器片が散在、ビットは北側一二箇検出、石おもりはじめ土器碎片も含むもの多し。

10 区 多くの土器片が散布、小形ビットが全面に出土、その数三五箇。

11 区 小形破碎土器片散在、大小ビット二五、中央で検出された「の字」状の35Pは、幅二〇cm、全長一m五〇cm、深さ二二cmで、注目される形痕をなしていた。また東壁近くの11Pはその深さ一・二mで底部に白粘土の貼布がみられた。

12 区 東隅から磨石及び注口（一）19）一点、南側から磨石・石斧と微小骨片二点、中央部から石盤・石おもり（一）34）、磨石と小骨片が出土、また35Pから打製石斧が検出された。ビット数一三箇。

6 区 北側に三箇所の泥ローム小地点があり、土器を多く出土し、ピット六箇、各Pとも土器片が含まれ、34Pは焼土、炭化物を多く検出、また36Pは、深さ五五cmの底部が白粘土で貼られていた。

7 区 北側半分は第三層をなす厚さ一五cmの黒色土層があり、8区に連続、この黒色土から石礫・凹石・石おもり・フレークと多くの土器片が収納された。また中央部の二二cmの深さから、配石に崩れをみせた八箇の焼石が検出され、第一二号炉址と確認された。周辺の灰・焼土の中から南三十稻場式と二仏生式の多くの土器片が出土、本区検出のピットは九箇、28Pは深度六五cmで、炭化物によって充満していた。

8 区 北と西側で二×二mの包含黑色土層が、第七区につながって発見され、かなりの土器片が出土。東側の浅い一六cmの地点では、完形にもかい深鉢土器が検出され、めぐりに多くの小砾石があり、周辺より凹石二点、フレーク等が収納された。ピット四箇のうち、40Pから土錐が発見され、その底部は白色細質粘土によってかためられていた。

9 区 南側ではローム層が高くなり、北側から多くの土器が点々と密集して発見され、焼石三箇（一25）の周辺から、凹石、フレーク、磨製石斧、摺石等が検出され、中央部では土錐が出土した。本区のピットは九箇、東壁の42Pからは磨製石斧及び凹石が、深さ九四cmの炭化物を含む孔土から発見された。

10 区 土器は全面的に稀薄散在し、南側からスクレーベー（一22）、摺石（一41）、凹石（一20）等が検出された。ピットは大小二箇、P中から三点の石おもり（一22）（一30）（一41）が出土

11 区 土器小石礫が多量に散乱し、中央部の深さ一七cmの地点から直径八〇cmの円形燒土地帯が検出され、その中心焼土は鮮かな正朱色をおび直径五〇cmを示していた。附近から小砾が多く発見されたが、焼土と認め難く、本地点を第一四号の平炉址と確認した。遺物は西壁で石礫が、南側ではスクレーベー、石おもり、凹石二点（一22）（一41）等が検出された。ピットは一〇箇で、その中40Pからは石礫・凹石が、また40Pでは炭化土の中から土器の把手がそれぞれ検出された。

12 区 本区も当時の持込みとみられる小砾が散乱し、南と東隅の一部に焼土も含まれていたが、南側からの移動性のものらしく詳細は不明、南及び西側に多くの土器片が出土、ピットは一八箇、45Pからは、石礫及び磨石が、また40Pからは、炭化物を含む孔土から多くの土器片がそれぞれ検出された。

◎ 遺物と遺構

遺物及び遺構については、推定予想の如く発掘地点が浅い包含層下にあったため、調査は短時日であったが、かなりの作業の進展と遺物の収納を

みた。しかし、その広面積からの出土遺物はきわめて多量で、平箱で一五〇枚以上のものとなり、整理も未だ半にしか進せず、十分な説明を示しない段階で、ここではその概要にふれるだけにとどめ、後日、正式報告書第二冊、遺物編出版に当り、詳説をつくしたい。

○遺物

△土器

本発掘で所見された出土土器は、数千年にわたる越後中越地方の麗文化中の後期に所属するもので

〔第一期 三十稻場式〕

〔第二期 南三十稻場式〕

〔第三期 三仏生式〕

〔第四期 塔が峠式〕

の全期間にわたる異形的な編年組成が示されていた。

三十稻場式土器は、縄文中期の盛行期のキャラバー状の深鉢土器等にみられる器物全面に施された、隆起線文手法による一元多配の渦巻きや、ワラビ状等のケンランたる土器模様が次第に退化し、その生活内容にも変化があったものか、一変した大小の魚鱗状、あるいは花弁状の突き刺し文や、口縁部に施された細い突起文上に点列刺された刻印文や、指頭圧痕による波点文や、網織文が出現し、器形が、頸部がくびれ口辺の内曲した蓋附のかめ形容器や、注口上器えと変遷していった生活期の什器遺物で、本発掘では第四Tにおいて好資料が多く収納された。

南三十稻場式土器は、第一Tの南側で戦後開拓によって収納された過去資料によつて筆者が形式編年したもので、太い曲削、あるいは直行沈線文や、棒状工具によるX状の双頭文等を主模様とし、その容器形は、ゆるい波状口縁を呈し、口縁が小さく内折し、口辺部に密接した・と二箇を一起とした小袋飾孔を持つとした朝風形の深鉢等を主格として、浅鉢・わん・つぼ・注口等の組成がみられ、小型土器は薄肉で、極端性を帯びてくる。この形類上器は、本発掘において第三T、第二T、第五T、第一Tの検出土器の主柱をなし、最も多量に掏出みた遺物であった。

三仏生土器は、小千谷市三仏生の清水上遺跡の出土土器が標準化されたもので、土器の焼成は良好堅緻となり、黒褐色をおび、滑沢に磨かれた薄手土器が土器で、口縁にはゆるい波状や、平口体、あるいは「豚口」と俗称されるS字構成の小突起裝飾把手をつけた精製深鉢土器や、つぼ・注口・浅鉢土器等が主系をなし、その施模様は、平行沈線、あるいは曲沈線を中心とした磨消繩文が発達した時代の土器で、南三十稻場式土器に伴つて若干量が把捉されている。

塔が峰式土器は、長崎市池の島の塔が其遺跡の上器を模式化したもので、その器形は深く切り込まれた波状口縁の深鉢等に、細長く突出した把手等が特徴をなし、浅鉢・つぼ・注口等で容器組成し、小彫文を押捺した斑讐文や口頬や副部に施したり、弧曲沈線で区画した磨綱文、あるいはまた塔々と模様の交錯点上に、小突起、突りゅうを配した土器等によってメルク・マールされるもので、これらの上器は第一Tの東側部分で若干量発見された。

△
全製品

土製品には、土偶・石像形土製品・耳飾り・土器もり等がかなり検出されている。

良、光沢をもつ。

〔石棺形土器品〕 西進に、有柄の角頭器が直線された長さ四五厘米、厚さ二三毫米のきわめて小形土器で、石棺に苦慮的には石材を用いたものが一〇〇%であるのに、本類は黄褐色を呈する粘土焼成物である。焼成はかなり堅く、その作法も繊技をつくしている。全国でも稀例資料となるものであろう。

〔土製瓦飾り 直径二三寸、厚さ一八mmの無孔づみ形の普通性陶物で、一面の凹土

△石器

本発掘では、浅層のためか、あるいは本質的に欠落していたもののか、打製石斧・石器等は案外少額の出土で、注目される点であった。

口石
鐵
有柄、無柄とも數十点の出土があり、その用材はチャート・珪石・粘板岩・凝灰岩を主としていた。

口は製石斧
長さ三八五、幅
五、厚さ八の小形磨り斧はじめ、大形の始方の三味新圓形のもの等が若干みられるが、その主材料は緑色鉄鉱。

卷之三

■磨石 長角三四寸、厚さ七分。前後の内あるいは横円形の小形磨平の磨石を磨いた無孔の小石器であるが、その用途は全く不明。數十点收藏。

□石 盤 欠片が多く、完形物は数点にしかすぎない。圓版八・下にみられる半欠片は、周辺より他の破片が出て完形となつたが、厚さ七・五cm、長径一八・四cm、短径一八・〇cmの四点有脚の代表形をなすものである。安山岩製。

□石 烧 安山岩の扁平小砾の両端を打ち出した通例造物で、數十個が検出されている。

□回 石 やはり安山岩の小転石を主材料とし、片面、あるいは両面中央に一・二・三點の小打凹撫をもつ音源性石器が數十点収納されている。

○炉址と住居址

三十畠場遺跡は、前述したように広大面積にわたる紀文後期の遺跡で、その地勢概況は北に漸及下傾性をなし、また東側に小谷水田をもち、西側もゆるく傾斜しているという条件下にあって、その東・西断面は、ゆるいカマボコ状の立地をなしているために、全面的に開墾以来、その長年の表土の移流が、ことに東及び西方向への流失がみられること、當時の生活我傍の包含地層が浅いという現象を生じさせたものであろう。

検出された炉址は、第一Tにおいて三基、第二Tでは二基、第三Tで二基、第四Tでは四基、第五Tでは四基、計一五箇地点に達した。これらの炉址と共に共通していることは、縄文中期には主として、長径一m~二mに及ぶ長大の方形性の配石炉がみられるのに對して、本遺跡に示されたものは、七・八〇cmの小形体を示し、しかもそのほとんどが円形状の小砾の石組によつて形成されていた。このような縄文中期から後期にわたる炉址の変形推移の理由は、基本的には食生活からの必然性や、採暖などの実用性要求と、家族人員の構成等にも遠因をもつものであろう。また、第一B T 9区の第三号ダルマ形炉址は、さきの岩野原遺跡発掘で出現した石碑だけのダルマ形炉（三仏坐式）に先行するもので、時間的には南三十畠場式文化期の所産に屬し、ことに大形土器をもつて中心が形成されていた形体は、貴重な先史資料をなすものであった。

後ノ號の住居址の多くが、時間的にローム層土の上に堆積している黒色腐植有機物を多分に含む厚層性という、歴史的時間の所産になる堆積系層土の中に、築造されている關係からか、その鮮明な露出把握が困難の中にあることが、全國的にも通例視されるところであつて、ここ南三十畠場においても、局地的な小部分に、住居の堅い床土の発見があつても、その全形をつかみえない条件のうちにあつた。

しかし、発掘面積が一・七七一m²の中に、検出された一基ずつの炉址を、通例の住居概念によつて、一つの家庭の中心拠点とするときは、附図三に示した如く、最低一五地点に堅穴住居が營まれたものとみなしてよいものであろう。しかし、それが時間的に同一時期の居住とする制約は、その一基、一基の住居床土に残された土器の製作時間を中心にその古代差格が決定されるものである。

また、附図五に測量された四七〇mに及ぶ諸形体のピットの複雑な所在に対し配考されることは、當時の建立住居の腐植や老朽性にもとづく再

建性と増補、またその移地性等や、あるいは其同体をなすその作業建造物の特殊形体の存在がからみ合った複雑な重複住居遺跡の姿が含まれていることが推考され、そこには前住居の取り廻しによる床上の均地破壊等で、鮮明な炉址の遺留存在は、第五地点ではわずかに四基しか記録しえなかったことである。しかし、無炉址地帯として検出されたローム面の残孔中、柱穴性ピットとみなされる条件を保有する孔跡や、小地点に検出された焼土等を中心に、附圖五の住居推定の六ヵの重複円形線の九区画も、一応考慮の中にありうることをここに述べておきたい。もしこれらを加算したときは、三十稻場遺跡の一半をなす南三十稻場地点の一、七〇〇m²の中に展開された住居戸数は、三十戸ちかい建造物の所在を中心とした当時としては稀例大形集落の存在推定が強く軋上げされるところであるが、しかし、そこには今次発掘で除外した第一Tの南側に遺続性を示す篠山櫛の広面積にひろがる未発掘包含地点と、さらに本三十稻場遺跡の大形包含地点を含まない住居数を指向しての場合である。

また各炉址周辺と、各T出土の縄文土器の編年的な時間位置の古さの剖出しからは、西方から第四Tにおいては、縄文後期の第一期をなす三十稻場式土器がはるか過半を数え、明らかにその居住の主体期を示し、それに第二期を構成する南三十稻場式土器の少數混合がみられた。また第一と三Tにおいては、その主軸をなすものは、第二期の南三十稻場式土器であり、さらに第五Tにあっても、南三十稻場式土器が主軸をなし、加えるに若干の第三期をなす三仏生式の土器の包含付出来をみて、さらにはまた浜道をこえた南側の第一Tにおいては、西側一帯には南三十稻場式土器の強度の所在があり、その第一期性を示し、第一Tはさらに東側地点に達するにしたがって、第三期の三仏生式土器と、後期最末期の第四期を形成する塔が峰式土器の存在が、次第に濃度を増していた。

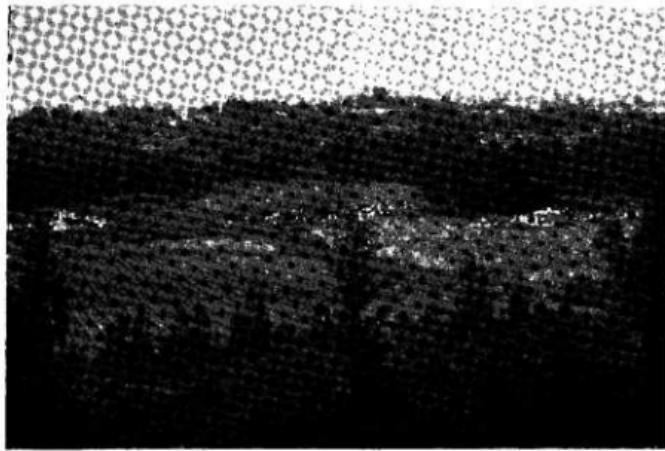
以上、各トレンチの土器包含順序の把握から要約結論づけうることは、発掘地点の集落形成の時間的存続が、西側の第四トレンチが縄文後期の石器文化中の古期をしめ、さらに南へ東する第三、第二、第五及び第一Tの各トレンチ地点の住居が、ほぼ同一時期をなして、それに続き、信濃川と黒川の合流点の三角台地上の篠山櫛で、漁るうと狩猟と自然物採集經濟を基礎とした「二十敷」の、南三十稻場集落の最高度のらん熟度時の安定生活がくりひろげられていったのである。そして北と西側から次第に南へ東漸してきた村落形成は、最も東側に所在する第一号炉址を中心としたその附近の住居が塔が峰式生活期を示す最終段階のものとなり、この遺跡の終結を物語っているのである。

三十稻場遺跡の今次第一回調査は、はじめその一部をなす南三十稻場地点における発掘対象面積を、一、一〇七m²を計画したものであったが、六日間の短時日のため、実施発掘面積は、その八四%の一、七七m²で終った。しかし、この調査は越後ににおける最大規模のものとなつた。そして発掘で把探したものは、集落形成の規模と、その遷移性。加えるに多くの生活什器類の遺物収納をみたことであった。ことに、おびただしい土器資料からは、歴史的変遷による土器形態とその組成変化と、ひいては越後ににおける縄文後期文化中の、時間的推移にもとづく土器選択基準の組上げに、大きな学術的寄与をなすものと考えられる。われわれは逐次本調査遺物を整備し、さらにこれらの資料に加えるに、広大な三十稻場遺跡の本拠

点をなす北方の、本三十種類の包含地点に対し、将来、第一～三次の発掘調査を実施し、本資料の不整、不足点をさらに補う越後の編文文化の学術的研究のよりよき成果を納めたいと希望するところである。

終りに、本調査に最善の協力をいただいた新潟県教育委員会はじめ、著中盛夏の長日時を現地で献身的に発掘を推進された研究団体、各学校の研究クラブ班等の参加諸氏兄につつしんで謝意を表すとともに、主催者の長岡市教育委員会及び長岡科学博物館・長岡市岡原出張所・関原町農業協同組合等の関係諸氏に感謝の意をつくしたい。

なお、今回の三十種類の第一次調査は、文化庁からの文化財防災施設費等補助金（緊急調査費）にもとづくものであることを明記して終焉とする。（四四・一・二七 中村）



遺跡の全景(雄山より)右1~T、中5T、左4T



発掘風景(西方より4~5Tを望む)



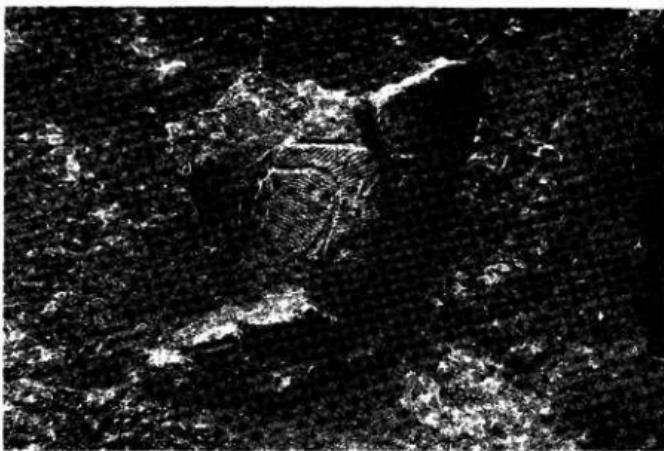
発掘スナップ(5日) 5T



発掘スナップ 1T



免 捷 ス ナ ッ ブ 《免捷社員を激励する小林長岡市民》



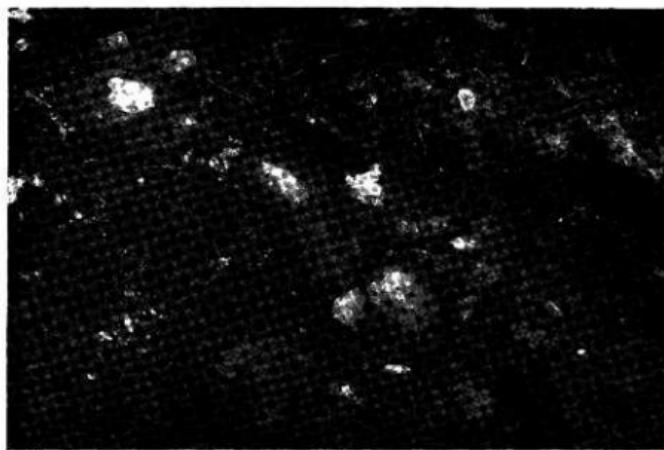
深 錄 土 墓 の 出 土 4 ET~' K



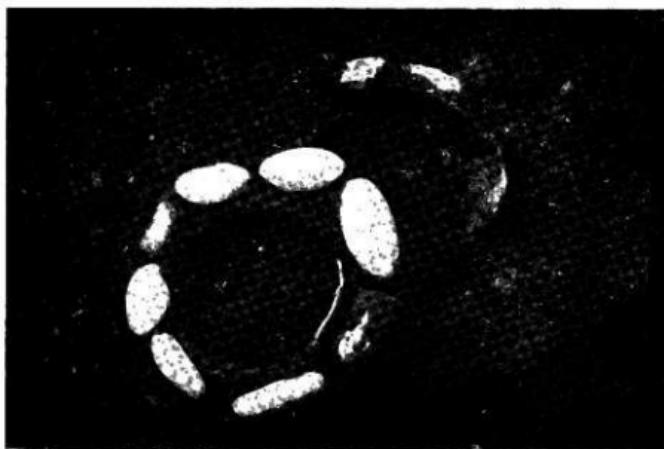
第 2 号 洞 址 1 BT~6 K



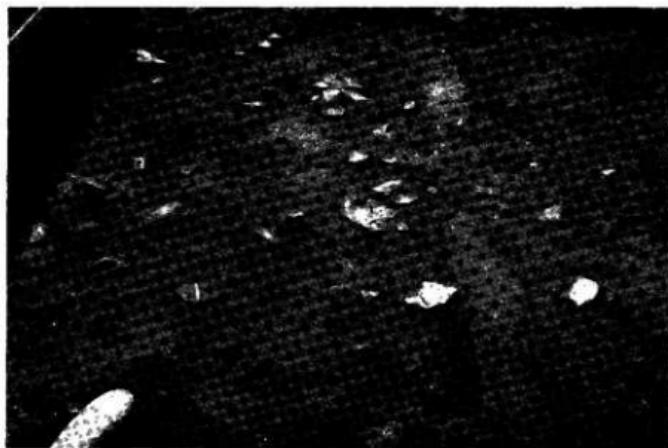
第 13 号 洞 址 の 出 現 5 CT~7 K



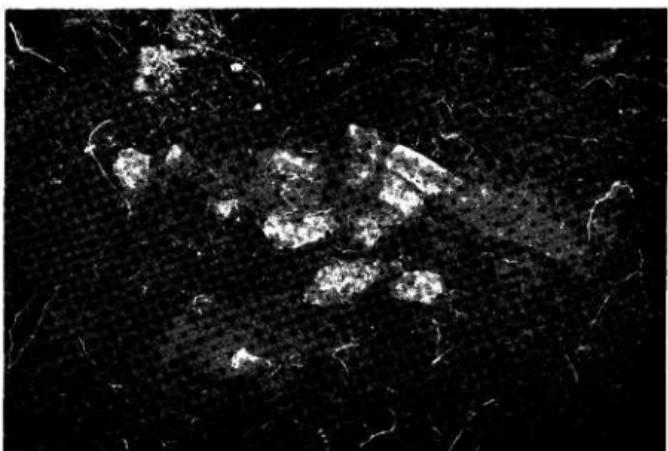
遺物の含包状況 4 BT~2 K



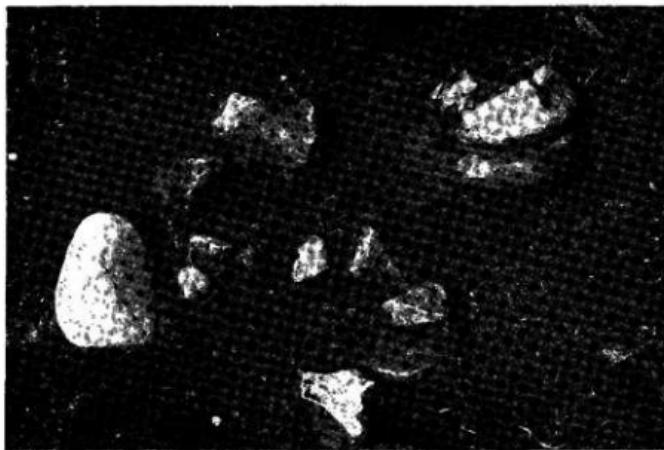
第3号タルマ形炉址、剥切り土器の伏置状況 1 BT~9 K



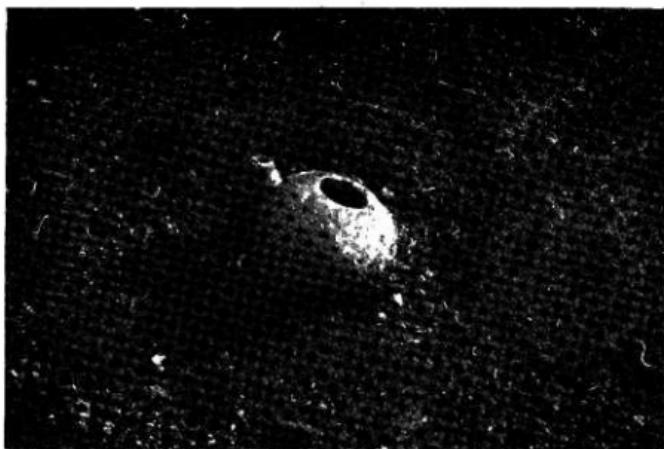
土器の出土状況 4ET~4K



土器の出土状況 4ET~2K



玄口形器の出土状況 5BT~8K



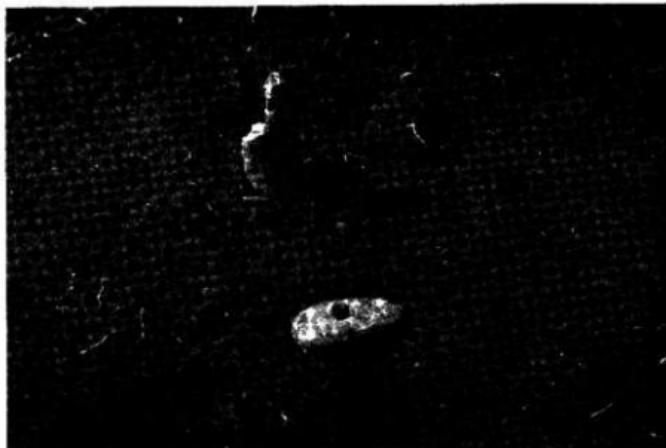
洗口土器の出土 1BT~6K



遺物の出土 4 E.T~4 K



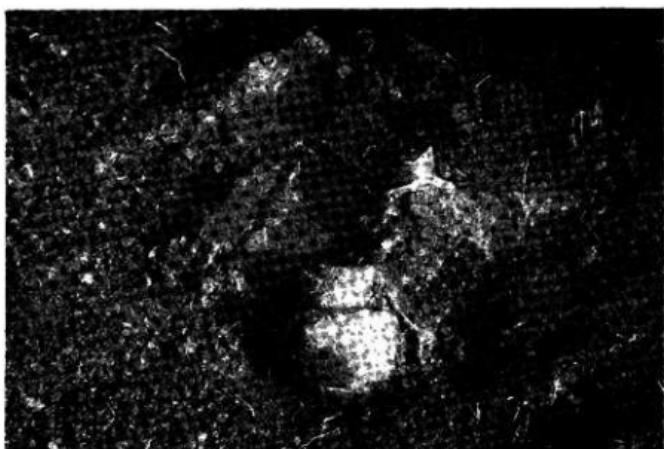
有刃石器の出土 1 CT~7 K



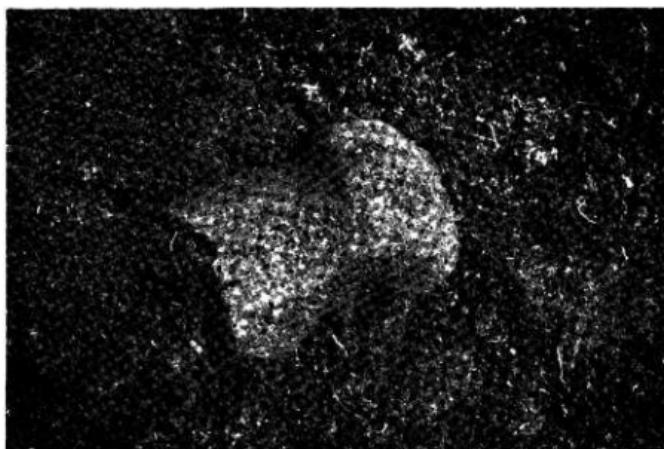
有孔石器の出土　[CT～6K]



三十組場式の土器「益」が出土　[ET～2K]



小形石口土器の出土 1TA~2K



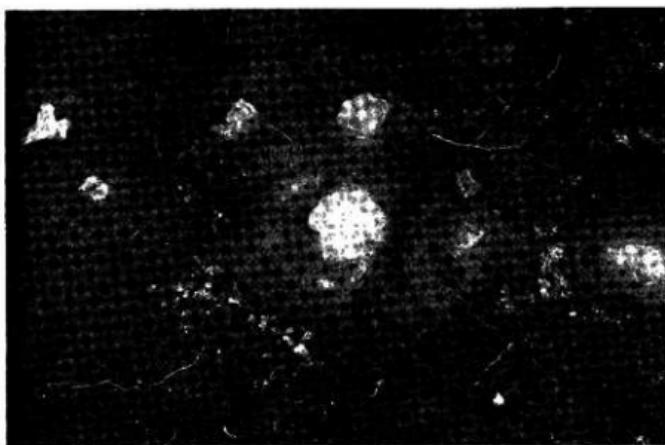
大形石棒頭部の出土 4ET~5K



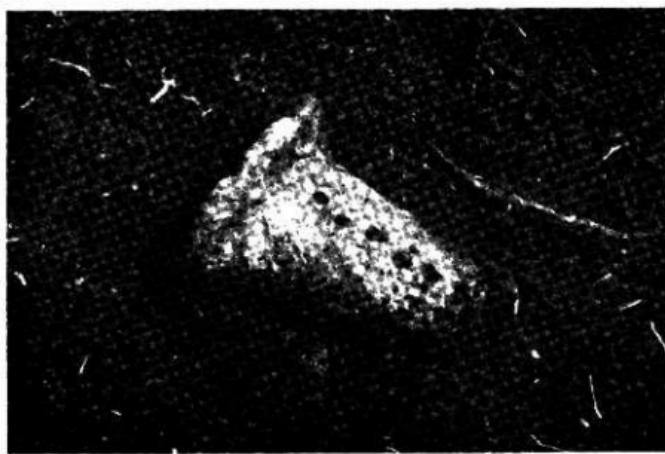
石 棒 形 の 小 形 土 製 品 4 E~1 K



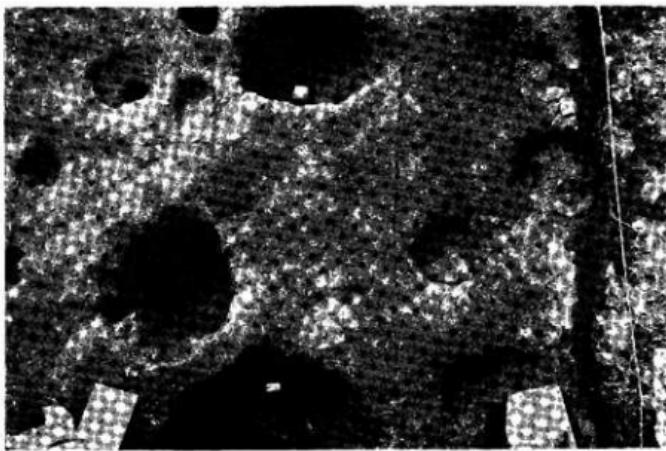
石 棒 頭 部 の 出 土 2 CT~1 K



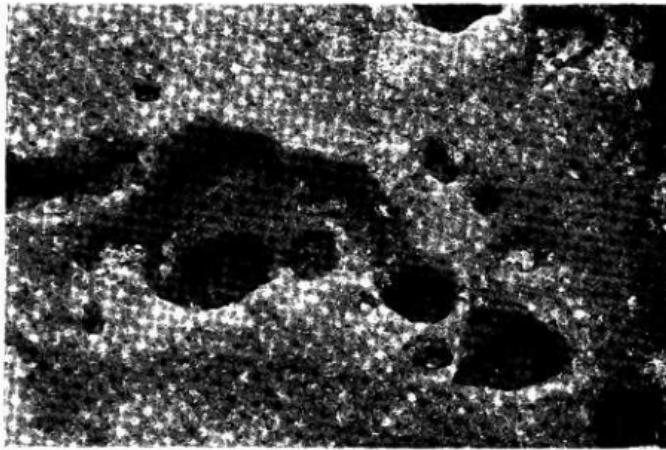
土製「蓋」の出土 4 E.T



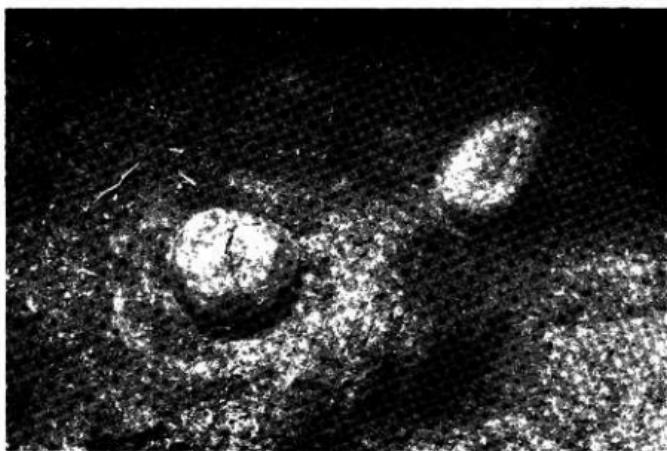
七偶の足脚部出土 4 D.T~3 K



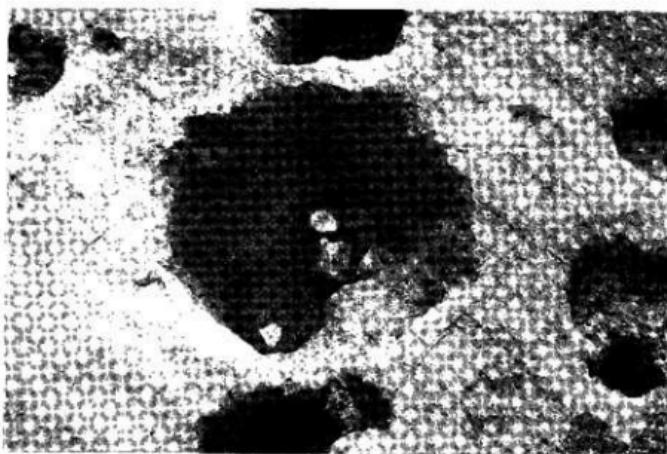
ローム上のビット 5T



ローム上のビット 5T



楕円形工具の出土 5B~5K



ビット中の磨製石斧破片と石器 5B~11KP[4]



道路の位置図 ⑧三十船場 ×馬高(火船土器出土)



図 43. 8. 17

南三十稻場

(長岡市關原町)

昭和四十五年三月三十日配備
昭和四十五年三月三十日發行

發行 長岡市教育委員會

(長岡市本町三丁目一番地十四)

印製 北越印刷株式公社
(長岡市福住一丁目六番七号)